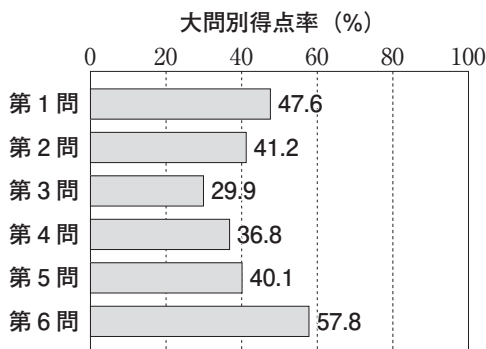
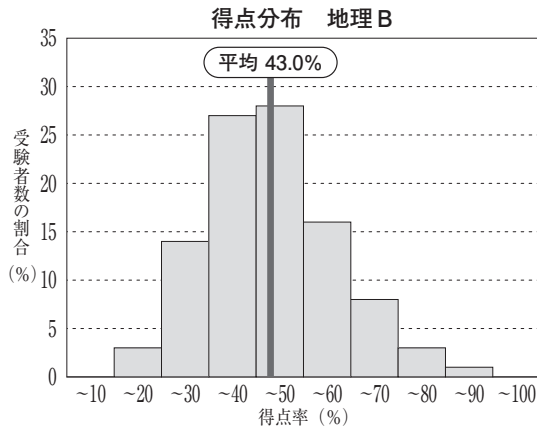


地 理 B

まずは高校地理全分野の基礎知識を、確実に身につけよう。

I. 全体講評

今回の第2回4月センター試験本番レベル模試の平均点は43.0点であり、前回2月の44.5点を下回る結果となってしまった。この2ヶ月で、得点力の向上はほとんど見られなかった。今年のセンター試験本試験の平均点62.3点とも19.3点の開きがあり、実力不足と言わざるを得ない。今回は、極端に正答率の低かった問題、特定の誤答の選択率が正答率を上回った問題が多く、その理由のほとんどは、基礎知識の不足によるものであった。特に人口・食料分野を扱った第3問でその傾向が顕著に出た。Ⅲ. 学習アドバイスを参考にし、まずは教科書・図説資料集レベルの基礎知識を確実に身につけること。一方、地図やグラフの読図能力と中学までの日本地理の知識である程度勝負できる第6問(地域調査)の出来はよかった。地理的センスには自信を持とう。



II. 大問別分析

第1問 世界の自然環境と自然災害

新期造山帯、古期造山帯など大地形の分布は基礎中の基礎。しっかり頭に入れよう。

大問全体の平均得点率は47.6%であり、6つの大問中で2番目に高かった。前回2月の同分野の平均得点率は34.9%であったから、この分野については順調に学力が伸びてきたと言える。自然地理は他分野を理解する基礎にもなる重要分野なので、このまま得意分野に育てたい。問5の正答率が12.6%と低かったが、多くの受験生が、カムチャツカ半島が新期造山帯に属する地形の高峻な地域であるとわからず、古期造山帯のなだらかな山地の連なるウラル山脈を、最も高度の高い地域と判断してしまった。新期造山帯、古期造山帯、安定陸塊、プレート境界など大地形の分布は基礎中の基礎なので、地図帳等を繰り返し見て、まずは分布をしっかり頭に入れること。

第2問 農産物・水産物の生産・貿易・消費

教科書と図説資料集の図表をよく見て、近年の農林水産業の実情を正しく認識しよう。

大問全体の平均得点率は41.2%であり、重要度の高い農林水産業分野としては物足りない結果となった。問3の正答率が20.0%と最も低かったが、多くの受験生が遺伝子組み換え作物が栽培されない③をイギリスと判断できなかった。遺伝子組み換え作物は、技術力の高い先進国から普及していると考えがちだが、実はそうではない。開発を進める米国資本の影響が強いアメリカ合衆国とカナダ以外では、農作物の不作が国家の財政危機に直結する発展途上国で普及が進み、ヨーロッパでは健康への懸念からあまり普及が進んでいない。教科書や図説資料集の図表を見て、その傾向をしっかり認識しておこう。また、問6の正答率も27.7%と低かったが、チリのフィヨルドでさけ・ます類の海面養殖業が盛んであり、日本へ大量に輸出されている事実を知らない受験生が多かった。これも図説資料集で確認し

ておきたい。

第3問 人口と食料

基礎知識と統計図表を読み解く力がともに不足。早く本格的な学習に取りかかろう。

大問全体の平均得点率は29.9%であり、6つの大問中で最も低かった。統計図表を扱う問題を多く出題したが、基礎知識が不足している上に、図表を読み解くことに慣れておらず、このような結果となった。教科書、図説資料集、用語問題集、穴埋めノート式問題集等を活用して早く必要な知識を身につけたら、センター試験の過去問やセンター型問題集の演習で図表問題を解く力も養いたい。出来の悪かった問いのうち、進学率の低いエチオピアの労働力率の高さを問うた問4はやや難しかったが(正答率8.3%)、世界に先駆けて少子化の進んだスウェーデンの改善事例を扱った問2(正答率31.8%)や、南アジアの緑の革命や中国の生産責任制を扱った問5(誤答④の選択率44.8%が正答率36.0%を大きく上回る)は、できれば正解したい重要問題である。解説を熟読し、よく復習しておくこと。

第4問 アメリカ合衆国とカナダ

地誌の重要度は増している。受験勉強では後回しにせず、早めに学習に取りかかろう。

大問全体の平均得点率は36.8%であり、6つの大問中で2番目に低かった。高卒生の平均得点率は47.5%とまずまずであったが、高3生が35.8%と低かったためである。多くの高校が系統地理を終えてから地誌を扱うため、例年、年度前半は地誌の出来が悪いのだが、2016年度よりセンター試験でも地誌の大問が1題から2題に増えるなど、地誌の重要度は増している。受験生が個々に受験勉強を進める上では地誌を後回しにせず、早めに学習に取りかかりたい。問4は、誤答②の選択率38.0%が正答率23.5%を大きく上回ってしまったが、カナダ東部は大部分が安定陸塊(カナダ楯状地)に属し、古期造山帯の分布域は狭い。ゆえに、カナダの石炭産出量はあまり多くない。第1問の講評でも述べたが、大地形の分布は重要である。早めに頭に入れよう。

第5問 東南アジア地誌

高卒生と高3生に大きな差がついた。高3生もできるだけ早く地誌の学習を始めよう。

大問全体の平均得点率は40.1%と振るわなかった。第4問と同様、高卒生は平均得点率52.1%と健闘したが、高3生は39.0%と力不足が露呈した。近年、地誌はより重要視される傾向にあるので、高3生もできるだけ早くから地誌の受験勉強に取りかかりたい。問3は誤答③の選択率が31.7%と高く(正答率は36.9%)、意外な結果となった。シンガポールの多数派民族はキリスト教徒の割合が小さい中国系であり、このことは基礎・重要事項である。③を正文と判断してしまった受験生は、図説資料集などで東南アジアの民族・宗教構成を確認しておきたい。

第6問 地域調査(岡山県倉敷市付近)

センター試験に毎年出題される分野で良い結果が出た。このまま得意分野にしよう。

大問全体の平均得点率は57.8%であり、6つの大問中で最も高かった。地図や統計グラフを読む能力、適切な地図表現を選択する能力、中学までに培った日本地理の知識を利用して正解を推理する能力など、地理的センスを試されたこの大問で好結果が出たことは喜ばしい。さらに演習を重ね、得意分野としたい。前回2月もそうであったが、古い地形図の水田の地図記号を知らない受験生が多かったため、問2は誤答③の選択率が57.9%と高くなり、正答率は27.7%と低くなってしまった。この機会に、解説にも掲げた古い水田の地図記号をしっかりと覚えておこう。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆まずは基礎知識を習得しよう

今回の模試では、多くの受験生が高校地理の基礎知識を習得できていないことが明らかになった。まずは、地形、気候、農林水産業、鉱工業、都市、人口、生活文化、地誌…のように、高校地理の全分野を網羅した問題集や穴埋めノートに取り組みとよい。その際、教科書、図説資料集、地図帳、用語集等を積極的に活用して、完全解答を作るつもりで問題を解いてみよう。そのような学習を続けていけば、高校地理の重要事項が自ずと頭に入ってくる。